

## 組織的な大学院教育改革推進プログラム委員会における評価

## 【総合評価】

- 目的は十分に達成された  
 目的はほぼ達成された  
 目的はある程度達成された  
 目的はあまり達成されていない

## 〔実施（達成）状況に関するコメント〕

「高度な専門性を備えた福祉現場の人材を養成する」という教育プログラムの目的に沿って、新研究科の開設、実務家教員の採用、ケースメソッド等の新しい教育方法の開発や導入、スーパービジョンの充実など、現場や福祉実践にとって利益ある双方向型・循環型の教育計画が実施され、大学院教育の改善・充実に貢献している。情報提供については、ホームページ、刊行物、公開研究会、シンポジウム、雑誌などによりある程度広く公開され、学内においては提携する社会福祉法人の増加、リカレント教育を目指す学生の確保、学外においてはケースメソッド教育について他大学からの参加を得るなどの実績があり、波及成果も期待される。

プログラムを組織的に維持するための体制の形成など、支援期間終了後の大学によるある程度の措置も示されている。

ケースメソッドの導入については、大学院生の満足度も高く、ケースの教材の執筆など医療福祉分野に導入する可能性を開いたことなど、一部のプログラムについては今後の展望が向上するなどの成果が得られているが、スーパービジョン教育の成果など、教育プログラムの成果についての定量的指標による検証がまだ緒に就いたばかりである。

当初の構想を意欲的に実現しようとする姿勢は感じられるが、今後だれが主体となって推進していくのが明確でなく、遅れの目立つインターンシップの実施など、継続性を図るためには、研究教員と実務家教員の位置づけについて改善・充実を一層図ることにより、発展が期待され、今後の取組についても更なる充実が望まれる。

また、FD研修、ケースメソッドの具体化や新たな教育システムの開発導入などに関する指摘については、措置が講じられているが、さらなる明確化が必要である。

経費については、海外旅費の配分が多い先進事例調査など、結果の評価や今後の経費確保の可能性などをかんがみした場合、効率的・効果的に使われたかどうかは一層の検証が必要である。

## （優れた点）

育成される人材像が明確であり、社会的ニーズにも対応しており、実務家のリカレント教育のモデルとなりえているので、本プログラムは、福祉人材養成の優れた教育モデルとして評価できる。

## （改善を要する点）

実務家教員の質の確保、研究教員との連携、スーパービジョンやオンデマンド教材開発、教育手法の有効性の評価などについても更なる具体化に向けた検討が望まれる。